

長野県本部 2022年支部合同写真コンテスト

審査 総本部事務局次長・関東本部事務局長 池永牧子

■総評

日頃からカメラを持ち歩き、早朝や雨天時にも積極的にシャッターチャンスを探して捉える一人一人の姿が写真から伝わってきた。そして地域の人々を見つめる撮影者の優しいまなざしも特に印象的だ。風光明媚（めいび）な自然に囲まれた地域に在住しているからこそ撮影できる貴重な瞬間を逃さず撮った作品も多かった。一瞬の動植物の営み、北アルプスや里山風景の美しさに心を動かされた撮影者の純粋な思いが写し込まれ、作品の魅力を高めている。

一方で何を伝えたいのか、主眼をどこに置くのか、構図とアングルをどうするかについて、あいまいなまま撮影している作品も目立った。被写体との距離や撮影ポジションをもっと丁寧に考えながら撮影することで写真表現が深まっていく。また、彩度や色調整などレタッチの技術がいま一つの写真も少なくない。ぜひ写真仲間と学び合いながら作品のクオリティを上げて、次の撮影にトライして下さい。

■講評

<最優秀賞>「ゆっくり休んで！」小林芳夫（東信支部）

人間らしさとおおらかさにあふれる1枚。お疲れさまと心の中で思わず声をかけたくなるシーンだ。駐車場の硬いアスファルトの上でも倒れ込むように眠ってしまう人たちを穏やかな視点で捉えている。この場所でのつかの間の休息を許して見守る地域の温かさもじんわりと心に響いてくる。

<朝日新聞社賞>「霜化粧」有井寿美男（東信支部）

命のはかなさと季節の移ろいを静かに語りかけてくれる。ほおずきの朱色と霜に覆われたチョウチョの亡きがらの白色の対比も印象深く、画面を引き締めて効果的だ。何より命を終えた小さな存在を見つめる撮影者のまなざしが光る。

<全日本写真連盟賞>「道くさ」青山益登（長野支部）

こんな風景が残っていることにほっとしてしまう。まっすぐ帰らずに田んぼのわらの上で友達と漫画を読む子どもの幸せなひとときが素直に写し込まれている。逆光のきらめきが肌や髪の子らかき、周囲の環境を引き立て、情景をさらに味わい深くしている。都会ではまず見ることが出来ない、ほほ笑ましい光景に見とれてしまう。

<優秀賞>「ぼうしの忘れ物」内山卿子（穂高支部）

厳しい寒さが造り出す自然の造形美を純粋な目線で撮影している。人の手が加わっていない氷と水の美しさと面白さにふと気づいてシャッターを切る撮影者の観察力が素晴らしい。

<優秀賞> 「マスクを取って下さい！」 原 茂樹（飯田支部）

記念撮影のために集ったお坊さんと関係者一人一人の表情に見入ってしまう。マスクを外す瞬間に見えた苦笑いに、コロナ禍に翻弄（ほんろう）されてきた人間の複雑な思いが重なる。この時代を刻む写真にもなっている。

<優秀賞> 「野仏」 西村美枝（長野支部）

斜光線と角度、石仏の表情と影、菊やバラなどの花の配色、どれも必要不可欠な要素で完璧な構図だ。静寂の中に穏やかで凜（りん）とした祈りを感じさせる。光と影が写真を作り出すことを改めて教えてくれる秀作だ。